日和ー四天王編ー　～白竜伝説～

白蜜庵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
日和ー四天王編ー　～白竜伝説～

【Ｎコード】
Ｎ８８７７Ｙ

【作者名】
白蜜庵

【あらすじ】
三千年に一度封印の力が弱まるとき、琥珀の龍が天を舞い、人々に災いをもたらすという。

伝説の始まり

黒い邪気が渦巻く空間

そこには2人の青年がいた。

一人は着物のような服に頭には角が生え肌の色は少し濃い。

もう一人は黒髪にすきとおる白い肌。

何の混じりけも無い深く淡い赤い目をしていて、紫色の着物を着ている

黒髪の方がつぶやく

「鬼男くんいよいよ今年だね」

そして「鬼男」と呼ばれたほうは
真剣なまなざしで言う。

「そうですね・・・」

だが黒髪の方はにこやかに答える

「さてと！そろそろ下界にいこっか」

そう言うとふわりとジャンプする

「はい」

そういったとたん

２人はその空間から消えた。

夕焼けに染まる山道

とある山道

曇り空なので今がどれくらいの時刻なのかはわからないが、昼過ぎくらいだろう。

この山道には僕と芭蕉さん以外に歩いているものはおらず、
さっきから誰ともすれ違っていない。

急斜面だから歩きにくいと言うのもあるが・・・

周りには木がうっそうとしげっていて、すぐ側に看板のようなものがささっている。

それもずいぶん古いものらしく、
表面が削れていてなんと書いてあるのかまったくと言っていいほどわからない。

おそらく村の表札かなにかだろう。

「ねぇ曽良くん・・・もうそろそろ休憩しようよ」

宿を出てからまだ五キロしか歩いていないというのに

もう弱音を吐いている

僕は芭蕉さんの弟子だが、どちらが師匠かわからない。

かの有名な松尾芭蕉だというのに、

ろくな句を読まない。

なぜだろう・・・

昔は、いや昔のことなので良く覚えてはいないが、
僕が弟子入りしたころは
一生この人について行こうと思っていたのに。

「さっき茶屋に寄ったばっかりじゃないですか」

「だって足がもうパンラハギだよ～」

そう言う芭蕉さんはふらふらと今にも倒れそうな状態で半泣き状態だ
足取りも遅く、これ以上進んだら本当に倒れてしまうかもしれない。

「まったく・・・困った弱ジジィだ・・・おや？」

目線の少し先に小さな村がある

村と言ってもとても小さく、民家が集まっているような大きさ。
こんな所に人が住んでいるのだろうか？

「ここで少し休んで行こうよ！」

いつもこうやって休んでばかりいる気がしますが・・・
僕も少し疲れていたので同意することにした。

「まったく・・・しかたないですね」
「ひゃっほーい！！！」
「あんまりはしゃぐと断罪しますよ」
「はしゃいだだけで！？」

そうして僕たちは小さな村へと

足を踏み入れた。

水車の音と川のせせらぎ

そこは自然が豊かでとても綺麗な場所だった

古風なところが多く、すぐそばで水車が回っている

聞こえる音といえば川のせせらぎくらいだ

「曽良くーん！待ってぇー」

すぐ後から力の抜けた声がする

やれやれ・・・・

こんなんで旅を続けられるのだろうか？

「そーらーくーん」

「聞こえてますよ・・・・」

「もっとゆっくり歩いてよ！」

「これでもそうとうゆっくりですよ？」

「曽良君の鬼！」

「はい？」

「え？だから・・・曽良くんのお・・・・」

「はい？」

「ううん、なんでもない・・・」

そんなことを話してるうちに一軒の宿に着いた。

宿と言っても小さく、部屋の数も少なそうだ。

「あれー？誰もいないのかなー？」

キョロキョロしながら
芭蕉さんが奥へと入っていく。

本当に人がいないようだ。

「あの・・・すいません」

さっき僕らが入ってきた出入り口のほうに
いつのまにか女の子がたっている。

「この村の子？」

芭蕉さんが尋ねた六秒後に
やっと声を出した。

「は、はいそうです
私は風里と言います」

その風里さんは、
栗色のショートカットの髪にうぐいすいろの着物を着ている。
話しかたからして人と話すのがあまり得意ではないようだ。

「あの、もしここに泊まるんでしたら・・・
代金はいりませんから」

そう言って視線を少し落とす。

何かがおかしい・・・・
隠していることでもあるのか・・・？

それにしても、
今まで宿代はいらないなんて言う人に出会ったことなど一度も無い。

「えーそんな悪いよ・・・」

芭蕉さんも感じているのだろうか、

この言葉では言い表せないような妙な感じを。

「いいんです。
だって貴方達は旅の途中でお疲れでしょう？
それに・・・こんな小さな村に松尾芭蕉さんが来てくれるなんて光栄ですから。」

その少女は微笑し、そのまま去ろうとした。

やはり・・・
隠していたようだ。

「どうしてこの人が松尾芭蕉だとわかったんです？」

そうだ。松尾芭蕉だとは一言も言っていないはず。
会話も聞かれていないだろう。
それに旅をしているとも言っていない。

「そ・・・れは・・・」

言い返せないようなら敵だと判断しますよ

そう言おうとした瞬間、
芭蕉さんが口を開いた。

「じゃあ、お言葉に甘えさせてもらおうかな」

芭蕉さん・・・？

「そ、それはよかったです。
よかったらまだ時間もあるようですし、散歩がてらに観光してみたらどうですか？
何も無い所ですけど景色はきれいですよ」

では、と言い残して風里さんは足早に去っていった。

何を考えているのかわからないが、
どちらにせよいいことではなかろう。

「ずっとここにいてもしょうがないから
風里さんが言ったように散歩でもしよっか」

芭蕉さんは一度伸びをし、振り向きざまにこういった。

「もう、後戻りはできないようだよ」

「いつから気付いてたんですか？」

「うーん、最初からかな

山道にいたときも何人かにつけられてたみたいだし」

「そうですか」

太陽が沈み始め景色が明るく染まっていき暗くなり始める。
なるほど、彼女の言っていたこともあながち嘘ではないようだ。
景色は今まで見たことも無いほどきれいだった。

「曽良君ー！どこ行くの？」

芭蕉さんは、はたはたと足音をさせながら後ろから走ってくる。

「散歩するんでしょう？」

「うん！」

このときはまだ、自体が徐々に悪い方向に進行していくのに気付いていなかった。

いや、本当は気付いていたといってもいい。

ただ気付きたくなかっただけなのかもしれない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8877y/

日和ー四天王編ー　～白竜伝説～

2011年11月27日12時46分発行